



2015年1月発行

救い主の父

「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおりに、妻を迎え入れた。」

(マタイによる福音書 1章 24節)

救い主イエス・キリストのご降誕の物語の中で、ヨセフはあまり目立たない存在です。イエス様の母マリアに対しては、熱いまなざしが寄せられますが、ヨセフはわき役として、あまり注意を払われないのが普通です。しかし彼は神様によって大切な役目を仰せつかった人でありました。

ヨセフは自分と婚約していたマリアが、二人が一緒になる前に身ごもっていることを知って、たいへん苦しむことになりました。仮にマリアの妊娠にヨセフが責任があるのなら、二人は当時の法においてはすでに夫婦なので、一緒に住むことが出来ました。しかし、ヨセフは身に覚えがありません。律法には、婚約中の妻が姦淫によって身重になれば、その娘も姦淫の相手も死刑になるという掟がありました。ヨセフは律法に従う正しい人だったので、マリアとの婚約はなかったものにしようと考えたのですが、そんなことをしようものなら大変です。愛するマリアを死刑に迫りやるのはしのびなく、どうにも打つ手がなくなったところで、天使が夢の中に現われて言いました。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。」ヨセフは眠りから覚めると、天使に命じられた通りに妻マリアを迎え入れました。

ヨセフはこのあと3回、夢で天使に会っています。最初がイエス様が誕生されたあと、天使から「エジプトに逃げなさい」という命令を聞いたヨセフは、大あわてでマリアとイエス様を連れて逃げてゆきました。次がエジプト滞在中、「イスラエルの地に行きなさい」との命令を受けた時も、ヨセフはこれに従って、イスラエルの地に帰って行きました。さらにもう一回、お告げに従い、ガリラヤ地方

のナザレの町に住みついたのでした。

天使が4回にわたって神の命令を告げたわけですが、ヨセフにとってこれに従うことは、どれ一つとして生易しいことではありませんでした。ヨセフの心中にためらいや心の揺れはあったでしょう。しかし福音書にそういうことは一切書かれておらず、そこにあるのは、ただ従順に、神から命じられ、託された務めを黙々と果たして行く彼の姿です。私たちはここに、自分自身と愛する家族を神にゆだねて生きる、信仰によって与えられた勇気を見ることが出来るのです。

ヨセフが神の命令に従ったことは、自分と家族を守ることになったのですが、私たちはそれが神の約束の実現に結びついていることを忘れてはなりません。1章22節には、イエス様の誕生について、「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」と書かれてありますが、ヨセフについて同様なことが計3回書かれています。

こうして見て行きますと、ヨセフは神の命令に従うことによって、図らずも、神の遠大な計画の実現に仕えることになったということがわかるのです。ヨセフ自身は自分の一つひとつの決断と行動が、まさか世界の歴史を変える決定的な意味を持っているなどとは夢にも思わなかったでしょうが。

信仰に生きるということは、このように、本人の思いを超えて、神の遠大な救いのご計画の一端を担うことであるのです。それは、何か大きなことをすることとは限りません。たとえ端からは小さく見えることであっても、自分に示された神のみこころに従順であれば、たった一人の人であっても、それによって歴史は進んで行くのです。

私たちも自分の気づかないところで、神様に用いられているということがあるのではないのでしょうか。私たちがそのことに恐れと感謝を覚えつつ、一人ひとりに対して示されるみこころにいつそう忠実でありますように。

(2014年12月14日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊